

注文の多い料理店



(Drawn by Hinako FUJIMURA)

兵隊のような服を着て、鉄砲を持った二人の若い男がいます。二人は、2匹の大きな白い犬といっしょに山に来ました。猟をするためです。

「この山は、よくないね。鳥や動物が一匹もない。何でもいから、早く鉄砲で撃ってみたいよ」と、一人の男が言いました。

「そうだな。鹿のお腹に鉄砲を撃ったら、気持ちがいいだろうね。鹿はくるくる回って、どさっと倒れるだろうな」と、もう一人の男が言いました。

二人は、山の奥の奥に来ていました。案内していた猟師も途中で帰ってしまいました。それに、大きな白い犬も途中で目をクルクルさせて、どさっと倒れてしまいました。

「この犬は高かったのに」と、男が言いました。

「そうだな。僕の犬も高かったのに」と、もう一人の男も言いました。

男は、もう一人の男に

「そろそろ帰ったほうがいいんじゃないか」と、言いました。

男の顔は少し青いです。もう一人の男も、

「そうだな。お腹もすいてきたし、そろそろ戻ろう」と、言いました。

二人は戻ることにしました。しかし、山の奥の奥まで来たので、帰る道がわからなくなってしまいました。二人は迷子になってしまいました。

急に、風がどうと吹いて、草がざわざわ、木の葉がかさかさ、木がごんごんと鳴りました。

「お腹がへったなあ」

「そうだな。もう歩きたくないよ」

「歩きたくないし、何か食べたいなあ」

「そうだな。何でもいいから食べたいなあ」

と、二人の男は言いました。風が吹いて、ススキの葉がざわざわとなっています。

そのとき、ふっと後ろを見ると、洋風の立派な建物が見えました。その入り口には、看板がありました。

RESTAURANT WILDCAT HOUSE

レストラン 山猫軒

「おい、こんなところにレストランがあるぞ。開いているみたいだ。入ってみよう」

「そうだな。でも、どうしてこんなところにレストランがあるんだろう。ふしぎだな。食事ができるのかな」

「もちろんできるよ。レストランって、書いてるじゃないか」

「そうだな。入ってみよう。お腹が減って、死にそうだ」

二人はとびらの前に立ちました。立派なとびらです。そして、とびらには金色の字でこう書いてありました。

遠慮しないで、どうぞ、ご自由にお入りください。

二人はとても喜びました。

「今日はずっと運が悪かったけれど、最後にいいことがあるなあ。このレストランは、無料でごちそうしてくれるみたいだ」

「そうだな。『遠慮しないで』って書いてあるから、無料で料理を食べさせてくれるはずだ」

二人はとびらを開けて、中へ入りました。中に入ると、すぐに廊下がありました。とびらの裏には、金色の字でこう書いてありました。

太った人や若い人は、大歓迎。

「大歓迎」と書いてあるので、二人は大喜びです。なぜなら、二人は若くて太っていたからです。

二人は廊下を進みました。すると、今度は青色のとびらがありました。

「変な家だな。どうしてこんなにたくさんとびらがあるんだろう」

「そうだな。たぶん、これはロシア風の家だ。寒いところや、山の中の家にはとびらがたくさんあるんだよ」

二人は、青色のとびらを開けようとしてきました。そこには、黄色の字で何か書いてありました。

このレストランは、注文の多いレストランです。ご注意ください。

「注文の多いレストランだって。こんな山奥なのに、人気があるんだな」

「そうだな。東京で人気のレストランも、人があまり来ない場所にあるだろう」

二人はそう言いながら、とびらを開けました。すると、そのとびらの裏にまた何か書いてありました。

本当に注文が多いですが、がまんしてください。

「これはどういう意味だ？」と、一人の男が不思議そうに言いました。

「そうだな。これは、注文が多くて料理に時間がかかるけれど、ごめんなさいって意味だ」と、もう一人の男が言いました。

「なるほど、そういうことか。じゃ、早くどこかの席に座りたいな」

「そうだな」

と、二人は言いました。

ところが、また一つとびらがありました。そして、とびらのそばには鏡がかかっていて、その下にブラシが置いてありました。とびらには、赤い字で

お客さま、ここで髪をきれいにして、靴の泥を落としてください。

と、書いてありました。

「なるほど。僕たちはずっと山の中を歩いていて、髪も靴も汚れている」

「そうだな。でも、ルールが厳しいレストランだ。すごく偉い人が来るんじゃないか」

と、二人は言いました。そして、髪をきれいにして、靴の泥も落としました。すると、どうでしょう。台の上にブラシを置くと、ブラシも台もぼうっと消えて、

風がどうっと部屋の中に入ってきました。

二人はびっくりして、急いでとびらを開けて、次の部屋に入りました。早く何か温かいものを食べたいなと思いました。早く温かいものを食べて元気にならないと、また変なことが起こるんじゃないかと、二人は思いました。

とびらの裏には、また変なことが書いてありました。

鉄砲と弾をここに置いてください。

とびらのすぐ横に黒い台がありました。

「なるほど。鉄砲を持って料理を食べるのは、マナーが悪い」

「そうだな。このレストランには、偉い人がよく来るんだろう」

二人は鉄砲を台の上に置きました。また、黒いとびらがありました。

どうか、ぼうしとコートと靴を脱いでください。

「どうする？脱ぐか？」

「そうだな。しかたがない。脱ごう。でも、本当に偉い人が奥の部屋に来ているんだな」

二人は、ぼうしとコートを脱いで、壁にかけました。そして、靴を脱いでぺたぺた歩いてとびらを開けました。とびらの裏には、

ネクタイのピンやメガネ、さいふなどの金属、特にとがったものは、
ここに置いてください。

と、書いてありました。そして、とびらの横には黒い立派な金庫もありました。
かぎもありました。

「なるほど。何かの料理に電気を使うんだろう。だから、金属は危ない。とが
ったものは、特に危ない」

「そうだな。じゃあ、お金は帰りにここで払うのかな」

「たぶんそうだろう」

「そうだな」

二人はメガネをはずしたり、ポケットからさいふを出したりして、全部金庫の
中に入れました。そしてかぎをかけました。

少し行くと、またとびらがありました。そして、とびらの前にガラスのつぼが
一つありました。とびらには、こう書いてありました。

つぼの中のクリームを顔や手、足にもよくぬってください。

つぼの中を見てみると、牛乳のクリームが入っていました。

「クリームをぬれというのは、どういうことだろう」

「そうだな。外はとても寒くて、部屋の中が暖かいから、顔や手が切れてしま

う。そうならないためのクリームじゃないか。奥の部屋には、本当に偉い人が来ているのかもしれないな。僕たちは、こんな山奥で偉い人と仲良くなれるかもしれないよ」

二人は、つぼの中のクリームを顔や手にぬって、それから靴下を脱いで足にもぬりました。まだクリームが残っていたので、二人は顔にクリームをぬるふりをして、こっそり食べました。

それから、急いでそのとびらを開けると、とびらの裏には、

クリームをよくぬりましたか？耳にもよくぬりましたか？

と、書いてありました。そして、小さなクリームのつぼがここにも置いてありました。

「なるほど。僕は、耳にぬらなかつた。耳が切れてしまうところだった。このオーナーは、本当に準備がいいな」

「そうだな。細かいことまで、よく気がつくよ。でも、僕は早く何か食べたいんだけれど、廊下ととびらばかりだな」

と、二人はいいました。すると、すぐに次のとびらがありました。

料理はもうすぐできます。

15分もかかりません。

すぐ食べられます。

早くあなたの頭にビンの中の香水をよく振りかけてください。

そして、とびらの前には、金色でピカピカの香水のビンが置いてありました。二人はその香水を、頭へばちゃばちゃ振りかけました。ところがその香水は、酔のようなにおいがしました。

「この香水は、酔みたいなおいだ。どうしたんだろう」

「そうだな。ウェイターがまちがえて入れたんだろう」

二人はとびらを開けて、中に入りました。とびらの裏には、大きな字でこう書いてありました。

いろいろ注文が多くて、うるさかったでしょう。すみませんでした。

これが最後です。体に、つぼの中の塩をたくさんつけてください。

そこには、立派な青いつぼが置いてありました。二人はぎょっとして、クリームみれの顔を見合わせました。

「どうもおかしいな」

「そうだな。ぼくもおかしいと思う」

「たくさんの注文というのは、向こうが僕たちに注文しているんじゃないかな」

「そうだな。このレストランは、お客さんに料理を食べさせるのではなくて、お客さんを料理にして食べてしまうレストランということなんだ。つまり、ぼ、ぼ、ぼくたちが・・・」がたがたがたがたがたがた。二人は震えて、何も言えなくなりました。

「に、にげ・・・」がたがた震えながら、一人の男が後ろのドアを開けようとしてきました。しかし、ドアはまったく動きませんでした。

廊下の奥の方に、もう一枚とびらがありました。そのとびらには、

ごくろうさまでした。
とても上手にできました。
さあ、中にお入りください。

と、書いてありました。そのとびらには、大きなかぎの穴が二つあって、かぎの穴からは、きよろきよろ二つの青い目玉がこっちを見ていました。

「うわあっ」

「うわあっ」

二人は泣き出しました。

すると、とびらの向こうで、こそこそと、こんな声が聞こえました。

「だめだよ。もう気がついてしまったよ。体に塩をつけないよ」

「そうそれはそうだろう。ボスの書き方が悪かったんだよ。『いろいろ注文が多くて、うるさかったでしょう』なんて、書かなければよかったんだよ」

「もう、どっちでもいいよ。どうせボスはぼくらに骨もくれないんだから」

「それもそうだな。でも、あいつらがここに来なかったら、ぼくらがボスに怒られるぞ」

「それは、困るな。じゃ、呼んでみよう」

「おい、お客さん、早くこっちへ来てください。お皿も洗ってありますし、野菜も準備できました。あとは、あなたたちと野菜をお皿の上へのせるだけです。早く来てください」

「いらっしゃい、いらっしゃい。サラダは嫌いですか？それなら、フライにしましょうか。早くいらっしゃい」

二人の男は、声も出ません。ぶるぶるがたがた震えて、顔をくしゃくしゃにして、泣いているばかりです。

とびらの向こうでは、何かが「ふっふっふっ」と笑って、叫んでいます。

「そんなに泣いたら、顔のクリームが落ちてしまいますよ」

「早くいらっしゃい。ボスがいすに座って、ナイフとフォークを持って、待っていますよ」

二人の男は、泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。

そのとき、うしろからいきなり「わんっ、わんっ、ぐわあ」という声がして、2匹の大きな白い犬がとびらをやぶって、二人の男のいる部屋に飛び込んできました。2匹の犬は、「ううっ」とうなって、しばらく部屋の中をくるくる歩いていましたが、「わんっ」ともう一度ほえて、いきなり次のとびらに飛びつきました。とびらはがたりと開いて、2匹の犬はその向こうに走って行きました。

とびらの向こうは、真っ暗でしたが、「にゃあお、くわあ、ごろごろ」という声がして、それから、がさがさと鳴りました。

すると、部屋は煙のように消えました。二人の男はぶるぶる震えながら、草の中に立っていました。

辺りを見てみると、コートや靴やさいふが、木の枝にぶらさがっていたり、草の上に落ちていたりしました。

風がどうと吹いてきて、草がざわざわ、木の葉がかさかさ、木がごんごんと鳴りました。

犬が「ふうっ」とうなりながら戻ってきました。そして、うしろから、「おーい」という声が聞こえました。

二人の男は急に元気になって、「おーい、おーい、ここだ、早く来てくれ」と叫びました。途中で帰った案内の猟師が、草をかき分けながらやって来ました。

二人の男は、猟師の顔を見て、やっと安心しました。

その後、二人の男は東京へ帰りました。しかし、泣きすぎてくしゃくしゃにな

った顔は、お風呂に入っても、何をしても、元には戻らなかったということです。

(4861 字)

(Written by Kenji MIYAZAWA)

(2020.7 Adapted by Toru YOSHIKAWA)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典: 「たどくのひろば」 (<http://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use this work, please indicate the source as in the example above.